『敦煌寫本研究年報』第五號（2011.03）257-285 頁

「金剛醜女縁」寫本の基礎的研究*

高井龍

序說

敦煌文獻中より發見された「金剛醜女縁」には、S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3048、P.3592V の 5 點の寫本がある[1]。その梗概は、以下の通りである。

波斯匿王の娘（金剛）は、前世に犯した口過の因縁により、醜惡な面貌となって生まれた。そのあまりの醜さ故に、父王によって軟禁され、誰とも會うことができなかった。幾年月を經て後、父王は夫となるべき人物（王郎）を探し出し、2 人は夫婦となる。金剛は、王郎が自分の醜さのために歎き苦しむ姿を見、佛へ歸依し、前世の罪業を懺悔することにより、絶世の美女へと變わる。その不可思議な事態に、波斯匿王家の者たちは佛のもとに詣で、その由を尋ねる。佛は金剛の因縁の次第を說く。

「金剛醜女縁」は、數多い敦煌文獻の中でも幾度も翻刻されてきた因縁譚である[2]。では、「金剛醜女縁」が斯界に提供されるにあたり、5 點の寫本はいかに校合されてきたのか。この問いに答えるための記述は、『敦煌變文集』（1957 年）の校記にある[3]。

> 此（醜女縁起……引用者）是乙卷前題。甲卷後題作「金剛醜女因縁一本」，丙卷題作「醜女金剛縁」。凡有五個寫本，原編號如下：

---

*本稿執筆には、2010 年 8 月の研究班大會に參加された諸先生方、特に、高田時雄先生、辻正博先生、玄幸子先生、荒見泰史先生よりの御教示を賜った。ここに記して厚く謝意を表したい。

[1]以下に述べる如く、この 5 點の寫本に冠された名稱は全て同じなわけではない。本論では、それらを總稱する場合に括弧（「 」）を付けて記す。

[2]「金剛醜女縁」が斯界の注目を浴びてきたのは、講唱體（韻文と散文を交互に用いる文體）によって書かれているためである。中國文學史における敦煌講唱體文獻發見の意義は、もはや贅言を要さないであろう。早くは青木正兒氏に言及がある。「從來吾人は語り物の源を尋ねて宋代まで遡り得たのであるが、此三篇（季布歌、孝子董永傳、目連縁起……引用者）の文の存在により少くとも五代まで遡り得るに至つたわけである。」「燉煌遺書『目連縁起』『大目乾連冥間救母變文』及び『降魔變押座文』に就て」『支那學』第 4 巻第 3 號、1927 年、123-130 頁。（『青木正兒全集』第 2 巻（春秋社、1970 年）に、「敦煌本佛曲について」として所收。）

[3]これより先に『敦煌變文彙録』（1954 年、上海出版公司）が出版されているが、寫本の校合に關する具體的說明はない。

甲卷　斯四五一一　自「我佛當日」起，在開端處較乙卷少一百四十八字。
乙卷　伯三〇四八　起首較甲卷多一段，末尾多一句，然全書似仍未完。
丙卷　斯二一一四
丁卷　伯三五九二
戊卷　伯二九四五　寫於卷背，字蹟不清，不詳校。
右五卷中，甲、乙兩卷最完備，然文字互有詳略。因此，選取兩卷中較詳和較好的部分，拼成底本。一般異同，不一一校出。開端部分用乙卷作底本。
按此故事在佛經中頗流行。百緣經有「波斯匿王醜女緣」，雜寶藏經有「醜女賴提緣」，賢愚經亦有「波斯匿王女金剛品第八」[4]。

この記述より、『敦煌變文集』における「金剛醜女緣」の校合が、S.4511 と P.3048 とを中心に行われたこと、またその 2 點の寫本の選擇基準が、殘存狀態の良し惡しにあったことが分かる。そしてこの校合方法は、『敦煌變文集新書』（1983 年）、『敦煌變文選注』（1990 年、および 2006 年の增訂本）、『敦煌變文校注』（1997 年）等、その後の主要な翻刻集に、長く踏襲されてきた。

ところが、校合の中心寫本とされた S.4511 と P.3048 を比較すると、そこには文字や文章の異同が散見される。つまり、兩寫本の內容が同じではないのである。これは、今日に至るまでの「金剛醜女緣」の翻刻が、異なる內容の寫本の校合によって行われてきたことを意味している。實は、S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3592V の 4 點は、筆寫中に起こる誤寫や脫文等を除けば、概ね同一內容と見做し得る。（S.4511 だけは結壇儀式の序文が添えられている。後述。）一方の P.3048 は、序文や韻文の加筆をはじめとし、多くの書き換えが行われている。更に、醜變との尾題があり、變文との關わりが示唆されてもいる。

このような P.3048 の獨自性は、しかし、S.4511 と P.3048 を中心とする從來の校合方法では充分には反映され得ない。S.4511 を中心とすれば、P.3048 の特徵は注記に追い遣られる。逆もまた然りである。更に、他の寫本を參考にしたところでは、問題は一層複雜化する。

本論は、このような問題を解決するため、「金剛醜女緣」各寫本の特徵を考察し、新たな校合・翻刻方法を提起するとともに、その書き換えや、變文への變化を明らかにすることを目指すものである。第 1 章では、「金剛醜女緣」と『賢愚經』「波斯匿王女金剛品」との關係から、「金剛醜女緣」の由來を考察する。第 2 章では、5 點の寫本をそれぞれに取り上げ、各々の書寫年代や、從來知られていなかった書寫上の特徵を考察する。その中で、上述した P.3048 と他の寫本との差異を明らかにする。第 3 章では、結末部分を有する S.2114V（一部殘缺）、S.4511、P.3048 の文體に着目し、現存する「金剛醜女緣」が、既に何者かの手によって書き換えられ

[4]王重民編『敦煌變文集』、人民文學出版社、1957 年、801 頁。

ている問題を扱う。第 4 章では、P.3048 にのみ書寫されている醜變という名稱から、變文の性質を考察する。なお、本論使用の畫像は全て國際敦煌プロジェクト（http://idp.bl.uk/idp.a4d）による。

第 1 章、「金剛醜女緣」の由來について

本章では、「金剛醜女緣」と『賢愚經』「波斯匿王女金剛品」との關係を考察する。

既に『敦煌變文集』に指摘される如く、「金剛醜女緣」には、佛教經典中に複數の類話が見られる。そして、その中の用語の檢討から、特に『賢愚經』「波斯匿王女金剛品」と近い關係にあることが分かっている。例えば、金剛という名稱は、現存する類話の中では「波斯匿王女金剛品」にしか使われていない。この見解は、傅芸子氏や關德棟氏らの指摘[5]以來、近年の研究に至るまで、特に異論は出ていない。しかし一方で、兩者の間には大きく異なる場面が見られる。特に、「波斯匿王女金剛品」では重要な場面が、「金剛醜女緣」には見られない。ここに、その場面の梗概を記す。

王郎と金剛が結婚して後、王郎は金剛を誰にも見せなかった。その王郎の態度を訝しく思った仲間たちが、王郎を醉わせ、金剛の部屋の鍵を奪う。時を同じくして、金剛は、過去の罪を佛に懺悔し、絶世の美女となる。王郎の仲間が金剛の部屋の扉を開けて目にしたのは、醜女としての金剛ではなく、この世に竝び無き美しさを備えた金剛であった。

この場面が削除されたことについては、既に傅氏も「以上這段情節，很有小說趣味，可惜作緣起（醜女緣起……引用者）的人未曽寫入。」と指摘している。

實はこれと同じことが、降魔變文にも起こっている。降魔變文もまた、佛教經典中に複數の類話が見られ、特に『賢愚經』「須達起精舍品」に近い。しかし降魔變文は、「須達起精舍品」と同系說話でありながら、それと異なる場面が少なくないのである。例えば、勞度差と舍利弗の法術比べの順序が異なり、且つ降魔變文ではその内容も多分に脚色されている。更に、敦煌壁畫の降魔變相圖では、最後の法術比べにおいて、「須達起精舍品」は勿論のこと、降魔變文からも一層の發展を見せる[6]。

---

[5]傅芸子氏「《醜女緣起》與《賢愚經・金剛品》」『藝文』第 3 巻第 3 期、1943 年。關德棟氏「《醜女緣起》故事的根據」『中央日報・俗文學』、1946 年。（ともに、『敦煌變文論文録』（周紹良・白化文編、上海古籍出版社、1982 年）所收。）楊青氏「《醜女緣起》變文及其佛經原型」『西北師大學報』（社會科學版）第 33 巻第 6 期、1996 年、50-52 頁。

[6]早くは松本榮一氏が、降魔變相壁畫が「『賢愚經』所說のものよりも更に詳細な内容」であるとの見解を示している（『敦煌畫の研究 圖像篇』、同朋社、1937 年）。そしてこれは、後に秋山光和氏

このような降魔變文の例に鑑みる時、「金剛醜女縁」と「波斯匿王女金剛品」との間には、幾許かの距離があったと言えるのではないか。両者が同系統の説話であることには筆者も異論はなく、それは降魔變文にも言い得る。しかし、『賢愚經』は、5 世紀半ばの于闐國で開かれた般遮于瑟（5 年に一度の法會）において、釋曇學等が聞いた説話がもとになったものである[7]。それから 400〜500 年の時を經、且つ地域も異にする 10 世紀敦煌において、『賢愚經』所收の説話と内容を異にした同系説話が存在していても不思議ではない。（「金剛醜女縁」が 10 世紀文獻であることは後述する。）

『賢愚經』は、敦煌にも流布した經典であった。9 世紀のチベット僧・法成は、『賢愚經』をチベット語に譯出している。そして、當時の敦煌壁畫には、『賢愚經』の説話が多數描かれている。つまり、敦煌の佛教徒には、『賢愚經』は馴染みのある經典だったのである。『賢愚經』に同系説話があるにも關わらず、「金剛醜女縁」には「波斯匿王女金剛品」に依拠したとは思われない内容が複數見られるということから、両者の間には幾許かの距離があったと考えられるのである。

では果たして、「金剛醜女縁」が依拠したところは何であったのか。

ここで着目すべきが、10 世紀敦煌の講經の中で、民間に容易に受容される話が様々に用いられていたことである。例えば伍子胥變文や舜子變文は、傳世文獻にはない要素を多分に取り込んでおり、神話の如き要素や、傳承説話の要素を持つことが指摘されている[8]。また、『維摩經』の講經文でも、本來『維摩經』にある筈のない中國思想が多分に盛り込まれている[9]。それら程ではないとはいえ、この

からの支持を得るに至る。「敦煌本降魔變（牢度叉鬪聖變）畫巻について」『美術研究』第 187 號、1956 年、1-35 頁。後、『平安時代世俗畫の研究』（吉川弘文館、1964 年）に所收。また、降魔變文と『賢愚經』「須達起精舍品」との差異については、次の論文も詳しい。Victor H. Mair, “Sariptra Defeats the Six Heterodox Masters: Oral-Visual Aspects of an Illustrated Transformation Scroll (P4524)”, *Asia Major*, Volume 8, Part 2, 1995, pp.1-52.

[7]「河西沙門釋曇學、威德等凡有八僧，結志遊方，遠尋經典。於于闐大寺遇般遮于瑟之會。般遮于瑟者，漢言五年一切大衆集也。三藏諸學，各弘法寶，說經講律，依業而教。學等八僧隨縁分聽，於是競習胡音折以漢義，精思通譯，各書所聞，還至高昌，乃集爲一部。既而踰越流沙，齎到涼州。于時沙門釋慧朗，河西宗匠，道業淵博，總持方等。以爲此經所記，源在譬喩；譬喩所明，兼載善惡；善惡相翻，則賢愚之分也。前代傳經，已多譬喩，故因事改名，號曰賢愚焉。」僧祐撰『出三藏記集』巻第 9「賢愚經記第二十」、『大正藏』巻第 55。

[8]David Johnson, “The Wu Tzu-hsu Pien-wen and Its Sources: Part I”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Volume.40, No.1, 1980, pp.93-156. David Johnson, “The Wu Tzu-hsu Pien-wen and Its Sources: Part II”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Volume.40, No.2, 1980, pp.465-505. 金文京氏「「伍子胥列傳」と「伍子胥變文」――『史記』の神話と文學」『史記・漢書』（鑑賞 中國の古典⑦）、角川書店、1989 年、438-474 頁。劉惠萍氏「敦煌寫本《舜子變》與舜神話」『中國古典文學研究』第 7 期、2002 年、115-132 頁。

[9]北村茂樹氏「『維摩詰經講經文』と『維摩經』との關係――スタイン三八七二文書を中心に」『佛教研究論集』、清文堂、1975 年、437-450 頁。

「金剛醜女縁」もまた、金剛を印度・波斯匿王の娘と設定しながらも、既にその夫の名を王郎とし、また話中に出てくる官職も中國名になる。

「金剛醜女縁」が民間説話であるとまで斷言する充分な材料はない。しかし、民間説話のように、その地域に適合した内容に改編された説話とは言えるのではないか。

第 2 章、「金剛醜女縁」5 寫本の考察

「金剛醜女縁」5 點の寫本内容は以下の通りである。S.4511 以外は講唱體文獻であることから、概ね 10 世紀に筆寫されたものと判斷される[10]。

S.2114

Recto：大乘百法明門論開宗義記

首題：大乘百法明門論開宗義記　京西明道場沙門曇曠撰

尾題：無

存：78 行

Verso：醜女金剛縁

首題：醜女金剛縁

尾題：無

存：104 行

S.4511

①首題：無（結檀轉經發願文）

尾題：無

存：30 行

②首題：金剛醜女因縁一本

尾題：無

存：170 行

題記：（紙背題）金剛醜女因縁一本

P.2945

Recto：歸義軍節度使兵馬留後使狀

首題：無

尾題：無

[10]荒見泰史氏「敦煌的講唱體文獻」『敦煌學』第二十五輯、2004 年、261-278 頁。同氏『敦煌變文寫本的研究』（中華書局、2010 年）所收。

存：73 行

Verso：金剛醜女縁

首題：金剛醜女縁

存：80 行

P.3048

首題：醜女縁起

尾題：醜變

存：147 行

題記：（紙背）壬午年二月廿一日

P.3592V

Recto：老子道德眞經注疏

首題：無

尾題：無

存：296 行

Verso：金剛醜女縁

首題：無

尾題：無

存：78 行

S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3592V を順に考察し、最後に P.3048 の獨自性を明らかにする。

S.2114V

S.2114R には『大乘百法明門論開宗義記』が書かれている。これは、玄奘が貞觀 23 年（西暦 649 年）に譯出した天親造『大乘百法明門論』一巻に對する曇曠の注疏である。今、上山氏の研究によると[11]、曇曠は、安史の亂を機に長安の西明寺から敦煌へ移った人物である。彼は 780 年代に他界したが、彼の著作はその死後も敦煌佛教界における教學テキストとして使われ續けた。それは、チベット支配期以降にも及び、大順三年（正しくは景福元年（西暦 892 年））の識語を持つ S.985『大乘百法明門論開宗義決』も見つかっている。『大乘百法明門論開宗義決』とは、同じく曇曠の手に成る『大乘百法明門論開宗義記』の難解な語句を解釋したものである。よって、當時においても『大乘百法明門論開宗義記』が學ばれていたことが分かる。上山氏は、それ以降も曇曠の注疏が學ばれていた可能性を示唆している。

[11] 上山大峻氏「曇曠と敦煌の佛教學」『東方學報』第 35 册、1964 年、141-214 頁。『敦煌佛教の研究』（法藏館、1990 年）に所收。

ここではまず、紙背の醜女金剛縁の書寫年代を考える。

先述の如く、これは講唱體で書かれていることから、10 世紀と考えられる。寫本の表と裏の書寫年代にあまりに開きがあれば問題が生じる場合もあるが、その點、『大乘百法明門論開宗義記』と醜女金剛縁との間に、書寫年代の問題は生じてこない。

次に擧げられる醜女金剛縁の特徵は、筆記者の交代である。筆記者 A が書き始めたところ、途中から別の人物 B が筆を執る。50 行目より、字と字の幅が異なりを見せ、且つ各字の空間の取り方も變化しているため、ここが B の筆を執り始めた箇所と分かる。特に、55 行目からの數行は、明らかに A の字ではない。これは、B が A に似せた字を書くことに徐々に困難を覺え、崩れていったものと判斷される。更に 58 行目では、誤って 1 行飛ばして筆寫し、その行を線引きして削除している。その後の 59 行目からは、再び A が筆を執る。恐らく、B は書寫するに相應しくないと見做され、再び A が筆を執ったものである。（圖 1 參照。）

S.2114V

49.　直下令人失笑。更道下情無任，得仕（事）丈母阿嫂。起居向前進歩（進歩向前），下情不勝恰（憐）好。

50.　其時大王處分：排備嚥（燕）會，屈請王郎。既到座筵，令遣宮人引其公

51.　主見對王郎。當爾之時，道何言語。云々

52.　新婦出見王郎，都縁面貌不多（多不）強。婇（綏）女嬪妃左右擁，前頭掌

53.　扇鬧芬芳。金釵玉釧滿頭挿，錦繡羅衣複鼻香。王郎纔見公主面，

54.　聞來魂魄轉飛傷（颺）。於是王郎既被諕到（倒），左右宮人，一時扶接，以水灑

55.　面，良久乃蘇。宮人道何言語？ 女縁生前貌不敷，每看恰以（似）獸

56.　頭牟。天然既沒弘（紅）桃臉，遮莫七寶叫身補（鋪）。夫主諕來身以到（已倒），宮人

57.　侍婢一時扶。多少内人噴水救，須臾還得却惺（醒）甦。

58.　總急阿姊無計思寸且着卑辭報答王郎云々

59.　於是兩個阿姊，恐被王郎恥嫌醜陋不肯却歸，左右宮人合皆總急。阿姊

60.　無計，思寸且着卑辭，報答王郎。云

61.　「王郎不用怪笑，只縁新婦幼小。妹子雖不端嚴，手頭纔（裁）縫

最巧。官職王郎莫愁,

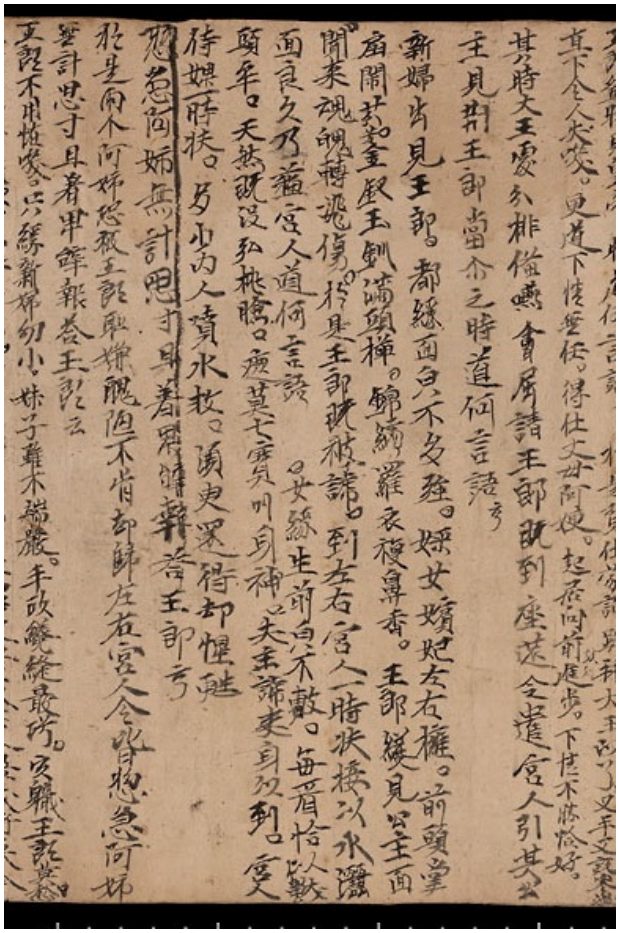

圖 1: S.2114V（49 行目〜61 行目）

また、この寫本のみは、韻文に句點が振られており、他の 4 點と異なる。最後の方で擱筆しており、未完である。

S.4511

S.4511 金剛醜女因緣は、首尾完結した文獻である。そして、金剛醜女因緣の前に、發願文が 30 行にわたって書かれている。『敦煌願文集』では“結檀轉經發願文”との擬題が冠されている[12]。この發願文は、從來の「金剛醜女緣」研究では充分には注目されてこなかった。しかし、31 行目からの金剛醜女因緣と明らかに同一人物による筆寫であることから、兩者の關係は肯定されるべきものであろう。以下、その發願文を翻刻する。（■は書き損じ。以下同。）

[12]黄徵・呉偉編校『敦煌願文集』、岳麓書社、1995 年、592 頁。

S.4511

1. 夫慈悲曠極（劫），願力難思。功圓於十地十心，身生於千
2. 手千眼。莫不示迷從（徒）於覺路，極（濟）顚墜於昏衢。迴六道
3. 而普遍大千，曆（歷）三祇而行願如一，四■弘誓重（願），六■度
4. ■齊修。拔危難而與安，敃（斷）苦源而獲樂。加又（以）眞言
5. 秘蜜（密），持念者，滅惡死而得善生；神力無邊，歸依者，
6. 除禍患而成福利。至於邪魔魍魎，惑人妖精，聞號
7. 則盡皆消亡，得名則自然降伏。有求必應，無願不
8. 從。魏魏（巍巍）大聖，雄威窮劫，不可測談者哉！
9. 厥今信珠内發，志意外舒。備妙供而轉經結壇、
10. 供慈等（尊）而祈恩告福者，厶乙奉爲先發願力，
11. 報佛弘威之作也。伏惟我府主大王祥金輝菜（彩），瑞玉
12. 含輝；緯地經天，九（究）文懷武。威望素（索）超於耿鄧，勲庸
13. 早萬（邁）於蕭張；符五百之休徵，膺千年之景祚。
14. 盛貌巍巍，疑梵天之降化；英姿蕩蕩，慮帝釋［之］
15. 分身。伏自撫育生靈，統臨龍（隴）右；愛宏旅而皆同
16. 赤子，恩臣民而不異兒孫。故得弘化五乘，紹隆
17. 三寶；無一日而不興佛事，無一時而散亂身心。深
18. 悟眞如，妙知法印；既曉浮生而有限，唯憑勝
19. 善而無餘。所以倍加懇意，種今身後世之良
20. 緣。年年而偏（徧）次安壇，件件［而］別捨珍玩。今於三春
21. 肇律，四序初開，選歲首之加晨（嘉辰），奉先願而姿（資）
22. 福。是以掛眞容於内閣，結神壇於寶臺；守淨
23. 戒於三晨（辰），供齋僧而（於）二七。其壇乃安五佛之蜜（密）鋪，
24. 嚴百花之秘方，益五趣之群生，解三塗之罪垢。
25. 而又唐言闡奥典之寶偈，梵音念蜜（密）教之眞
26. 言；聲聲不絶於晨昏，句句夭（無）休於晝夜。點
27. 銀燈而明朗，照無閒之幽冥；散穀食之香
28. 花，施水陸之含識。火壇燒香物種種，呪印
29. 而想念般［般］；供一切之聖賢，救六道之苦厄。
30. 更乃去冬傎（値）相銜之月，遂邀釋衆之明僧。

まず、この書寫年代を考える。

11 行目の“府主大王”は曹元忠を指すと考えられるため[13]、同じ筆者による金

[13]“據榮新江考證，在歸義軍統治敦煌時期，稱「大王」者分別爲曹議金、曹元忠和曹延祿，疑此

剛醜女因縁も、その時代に書かれたことになる。よって、S.4511は10世紀文獻と言える。これは、「金剛醜女縁」研究において重要な意義を持つ。他の4點の寫本が講唱體で書かれていることを併せ考えると、現存する「金剛醜女縁」5點の寫本が、全て10世紀文獻と判明するためである。

續いて14行目以降に注目すると、まず曹元忠は、梵天や帝釋天になぞらえられ、その隴右における統治が賞讃される。そして、彼が深く佛教に歸依し、この世の無常を悟り、來世への良縁が結ばれていると說く。その後に續く儀式次第では、八大地獄の中でも最も下位に位置する無間地獄にさえ銀燈の光が點ると說く。この發願文の後に書かれている金剛醜女因縁は、このような結壇儀式に使われたのである。

もう1つ金剛醜女因縁の書寫狀況について注目すべきは、誤寫の量である。

上掲の發願文に續く金剛醜女因縁は、先述の如く、筆寫の際に起こる問題を除けば、S.2114V、P.2945V、P.3592Vとほぼ内容を同じくしている。しかし、S.4511は他に見られぬほどに誤寫が多い。一般に、誤寫は多くの人に書き繼がれるほど多くなる。ごく數人に筆寫されただけでは、誤寫もまだ多くはならないが、多くの人に筆寫され續ければ、それに從い誤寫も增えていくものである。S.4511の誤寫の量は、上掲の發願文からも窺えるが、ここでは王郎が國王の前に連れて來られた場面を取り上げる。（網掛け文字は衍字。以下同。）

S.4511
87.　遂朝（詔）宰相，速令引到。皇帝座（坐）想（於）寶殿，
88.　宰相曲弓（躬）如來見：「前時奉獻覓人，今日得
89.　衣（依）王願。門前有一兒郎，性行不坊（妨）慈善。出
90.　來好哥（個）面貌，只是有些些舌短。」云云
91.　大王聞說喜徘徊，倦（捲）上珠簾御悵（帳）開。既強聖
92.　［人心］裏事，也兼皇后樂嘵嘵（咳咳）。嬪妃媟（綏）女令詔入，
内監
93.　忙忙迤邐催。便把被（布）衫揩式（拭）面，打板精身（神）
94.　強入來。王郎登時見皇帝，道何言語：於是貧仕（士）
95.　蒙詔，詭（跪）拜大王已了。叉手又說寒温，直下令人
96.　失笑。更道下情無任，得仕（事）丈母阿嫂。超（起）居進步

處指曹元忠。”黄徵・呉偉編校『敦煌願文集』、岳麓書社、1995年、593頁。余欣氏『神道人心――唐宋之際敦煌民生宗教社會史研究』、中華書局、2006年。『願文集』に引く榮新江氏の研究は、「沙州歸義軍歷任節度使稱號研究」『敦煌吐魯番學論文集』、漢語大詞典出版社、1990年、768-816頁。（『歸義軍史研究――唐宋時代敦煌歷史考索』（上海古籍出版社、1996年）に所收。）

97.　向前，下情不勝恰（憐）好。其是（時）大王處分：俳（排）備燕
98.　會，屈請王郎。既到座筵，［令］遣宮人引其公主
99.　［見］對王郎。當爾之時，道何言語？ 新婦出來見［王］郎，都

“仕”と“事”のような通假字もあり、後世の我々がどの字をどこまで嚴密に誤寫と見做すべきか、判斷の難しいところもある。それでも、1行に複數文字の誤寫や脱字が見られていることは見逃せない。この點から判斷するに、金剛醜女因緣は、多くの人手をわたって書寫されてきたのであろう。それは、「金剛醜女緣」が當時の敦煌に廣く受容されていたことを示している。次章に見るように、「金剛醜女緣」には少なくとも3段階の書き換えがあった事實も、この見解に通じるものである。

ところで、序に引用した『敦煌變文集』の校記に述べる如く、「金剛醜女緣」の同系說話は『賢愚經』、『雜寶藏經』、『撰集百緣經』に所收されている。これら3つの經典は、多數の佛教說話を收めており、中國において廣く受容されてきた經緯がある。「金剛醜女緣」が多くの人手を經て書き繼がれていた事實は、それら3つの經典全てに同系說話が採録されていることとも關係を有するものと考えられる。

なお、このS.4511は、一度何かを書寫した寫本を二次利用している形跡が見られる。この寫本のあり方については、寫本を實見した際に、報告したい。

P.2945V

P.2945Rには、歸義軍節度使兵馬留後使狀が書かれている。これは、眞題ではなく、『敦煌遺書總目索引新編』（敦煌研究院編、2000年）による擬題である。ここに書き連ねられた8件の内容については、李正宇氏、楊寶玉氏、呉麗娛氏等によって考察が進められ[14]、曹元深の時代、特に西暦923年から924年の間に書寫されたことが明らかになった。よって、紙背の金剛醜女緣はそれ以降に書かれたことになる。S.2114Vと同じく、金剛醜女緣が10世紀の講唱體文獻であることと矛盾をきたさない。

さて、この寫本の注目すべき點は、韻文吟詠法の注記である。

敦煌文獻には、“平”、“側（仄）”、“斷”、“吟”等の文字によって、實際の講經における韻文の歌唱吟詠の方法が示されているものが數多くある[15]。「金剛醜女

[14]李正宇氏「曹仁貴歸奉後梁的一組新資料」『魏晉南北朝隋唐史資料』第11期、武漢大學出版社、1991年、274-281頁。呉麗娛氏「再析P.2945書儀的年代與曹氏歸義軍通使中原」『敦煌研究』2002年第3期、74-80頁。楊寶玉氏、呉麗娛氏「P.2945書狀與曹氏歸義軍政權首次成功的朝貢活動」『敦煌吐魯番研究』第11巻、2008年、269-296頁。

[15]しかし、その具體的な意味については未だ明らかでない部分も多い。以下、若干の先行研究を擧げる。向達氏「唐代俗講考」『唐代長安與西域文明』、三聯書店、1957年（初稿は『燕京學報』第16期、1937年）。孫楷第氏「唐代俗講軌範與其本之體裁」『國學季刊』第6巻第2號、1937年。那

縁」では、P.3592V に“平”が書かれていることは既に知られていたが、IDP 畫像を用いることにより、それが P.2945V にも發見されるに至った。以下、該當箇所の翻刻である。（圖 2、3 參照。）

P.2945V

43.　天生貌不強，只要且晾眝（瞟眝）[16]。覓取一兒郎，娉與爲夫婦。」
　平

44.　「卿爲臣下我爲君，今日商量只兩人。召慕（招募）切須看穩審，

P.3592V

55.　有一親生女。天生貌不強，只要且瞟眝（瞟眝）。

56.　覓取一兒郎，娉與爲夫婦。」云云　平

57.　「卿爲臣下我爲居（君），今日商量只兩人。

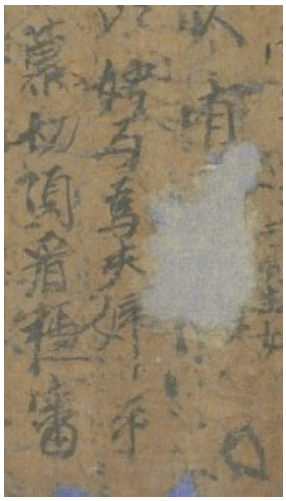

圖 2: P.2945V

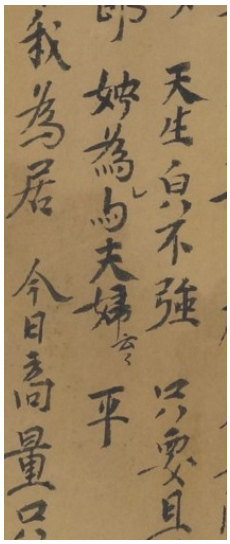

圖 3: P.3592V

韻文吟詠法は、韻文の冒頭に書かれることも少なくない。それにも關わらず、この P.2945V と P.3592V の“平”は、揃って韻文直前の行の末尾に書かれている。更に、兩寫本ともこの一箇所にしか韻文吟詠法が書かれていない點でも一致して

波利貞氏「中晩唐五代の佛教寺院の俗講の座に於ける變文の演出方法に就きて」『甲南大學文學會論集』第 2 號、1955 年、1-74 頁。牛龍菲氏「中國散韻文相間兼說兼唱之文體的來源」『敦煌學輯刊』創刊號、1938 年、23-49 頁。王昆明氏「佛教唄讚音樂與敦煌講唱辭中“平”、“側”、“斷”諸音曲符號」『中國詩學』創刊號（『中國早期藝術與宗教』（東方學術叢書、1998 年）に所收。）李小榮氏『變文講唱與華梵宗教藝術』、上海三聯書店、2002 年。

[16]瞟眝については次の論文による。陳治文氏「敦煌變文詞語校釋拾遺」『中國語文』1982 年第 2 期、119-128 頁。

おり、兩者の近似性を示すものと言えよう。

P.3592V

P.3592V は、5 寫本の中で、最も早い段階で擱筆している。しかしその短い中からも、S.4511 はもちろん、S.2114V や P.2945V よりも誤寫が少ないことから、5 點の寫本の中では、P.3592V は初期の書寫狀態を殘したものと考えられる。

例えば、金剛が王家に生まれながらも醜くなった因縁を述べる場面が擧げられる。各寫本の太字部分に着目して頂きたい。

S.2114V

7.　**托（託）**生？ 向波斯匿王宮内託［**生**］。此是布施因縁，生於國王之家。輕慢

P.2945V

7.　日間，此女當時身死，向何處**託**生？ 向波斯匿王宮内託

8.　**生**。此是布施因縁，生於國王之家。輕慢賢聖之業，■敢（感）

P.3592V

8.　□（便）生輕賤。不得三五日間，此女當時身

9.　死，向何處**託**生？ 向於波斯匿王宮内託**生**。

P.3592V は、P.2945V とともに、S.2114V に見られる誤寫がないことが分かる（“托”、“生”）。

次は、金剛が父王に軟禁され、10 年もの間、人前に出られなかった場面である。

S.2114V

22.　更覓良媒。雖然富貴居樓殿，恥辱緣房（無）**頃（傾）**國財（材）[17]。勅下十年令

23.　鑠閑，**心（深）**宮門戸不曾開。於是金剛醜女日來月往，年漸長

24.　成。夫人宿夜憂愁，恐怕大王不肯發遣。後因遊戲之次，夫人**殿（斂）**

25.　容進歩，向前咨白大王：「賤妾常慙醜質身，虚霑宮宅與王親。

P.2945V

24.　恥辱緣房（無）**頃（傾）**國財（材）。勅下十年令鑠閑，**深**宮門戸不曾開。

25.　於是金剛醜女日來月往，年漸長成。夫人宿夜憂愁，恐大王不

[17]『敦煌變文校注』“以文義及韻脚求之，原文當作『恥辱緣無傾國才』。”に從う。

26.　肯發遣。後因遊戲之次，夫人**殿**（**斂**）容進步，向前咨白大王。云云

P.3592V

27.　慙惶誰更覓良媒。雖然富貴居樓殿，恥辱緣房（無）**傾**國財（材）。

28.　勅下十年令鑠閇，**深**宮門戸不曾開。云云

29.　於是金剛醜女日來月往，年漸長成。夫人宿夜憂愁，

30.　恐大王不肯發遣。後因遊戲之次，夫人**斂**容進歩，向前咨

P.3592 は、S.2114V と P.3592V とに見られる誤寫（“頃”、“心”、“殿”）が、正しく書かれている。

このような特徴から判斷すると、5 點の「金剛醜女縁」寫本の中では、P.3592V は比較的初期の書寫狀態を殘した寫本と考えられる。

着目すべきは、P.3592V と P.2945V との共通性である。上に見たように、兩寫本は、共通して韻文導入表現（“平”）を持ち、その表記方法も一致するという特徴があった。それを併せてこれらの例を見ると、兩寫本は、5 寫本の中では比較的近い關係にあったと考えられる。

P.3048

上掲 4 點の寫本は、誤寫や脱文等による若干の文字の異同を除けば、概ね内容は同じである。しかし、P.3048 はかなりの書き換えが行われ、且つ改編されている。ここでは P.3048 と他の寫本の差異のうち、i）加筆、ii）加筆・削除・話の順序の入れ替え、iii）韻文の書き換え、という 3 點に着目し、P.3048 の獨自性を明らかにする。紙幅の關係上、結末まで完備している S.4511 を 4 點の寫本の代表例とし、P.3048 と比較する。

i）加筆

まず、P.3048 には他の 4 點の寫本にはない序文がある。

P.3048

1.　醜女縁起

2.　我佛因地，曠劫修行。投崖飼虎，救鴿尸毗。爲求半偈，心地不趍（移）。剜身然

3.　燈，供養辟支。善友求珠，貧迷。父王有病，取眼獻之。大聖慈悲因

4.　地，曠劫修行堅志。也曾供養辟支，帝釋天來［□］誠（試）。割肉際（濟）於父

5.　王，山内長時伏氣。去世因［□］修行，三界大師便是。世尊當日度行壇，

6.　爲救衆生業障纏。也解求珠於大海，尸毗救鴿結良緣。三徒（途）
7.　地獄來往走，六道輪迴作舟船。爲度門徒生善相，感賀（荷）如來聖
8.　力潛。我佛當日爲救門徒六道輪迴，猶如舟船，般［運］衆生，達於彼

P.3048 以外の 4 點の「金剛醜女緣」は、全て 8 行目の“我佛當日爲救門徒”から始まる。この序文が後から加筆されたことは明らかである。

このような序文の加筆は、敦煌文獻では珍しいものではない。例えば、S.3491 の破魔變と頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變に同じ押座文が附されていることや、降魔變文に玄宗皇帝の稱號を用いた莊嚴文が挿入されていること等は、その代表例である。

更に、この序文が本生譚を列擧している點も注目すべき特徵である。本生譚を冒頭に列擧することは、變文を含む多くの講經文獻に見られる特徵である。ただし、本生譚の記述については、本論のような研究ではなく、より大きな視點からの詳細な考察が必要とされるため、ここでは以上の指摘に留めておく。

さて、上掲の序文の少し後にも、P.3048 には 5 行にわたって新たな文章が加筆されている。加筆された箇所を太字で示す。

S.4511
33.　達於彼岸。［此時］總得見佛，今世足衣足食。修行時至，懃（勤）
34.　須發願。布施有多種因緣，一一不及廣讚。設齋歡喜，
35.　果報圓滿。若人些子攢眉，來世必當醜面。佛在之

P.3048
9.　岸。此時總得見佛，今世足衣足食。修行時至，勤須發
10.　願。**有餘供養佛僧，得數結紹見。此時更若修行，來世勝於（相）定現。**
11.　**我佛慈悲世莫誇，救度衆生遍河沙。總得到於無爲處，**
12.　**今生富貴足嬌闍。人身不久如燈炎，世事浮空似雲遮。**
13.　**供養佛僧消滅障，來生必定禮龍花。**
14.　**來如（如來）長說誘勸門徒，焚香發願，勤念彌陀，修齋造善。**布
15.　施有多［種］功德，一一不及廣讚。設齋歡喜，果報圓滿。若己些些

この加筆により、P.3048 の文章にぎこちなさが生じたことは否めない。しかし、この點からも、P.3048 と他の 4 點の寫本との内容の相違が讀み取れる。

また、P.3048 の加筆は、王郎と金剛が結ばれた後の場面にも見られる。太字が加筆された箇所である。

P.3048

82.　王郎遣妻不出，恐怕朋友怪笑。三娘子莫漫狂顚，不要出頭出惱。」

83.　**妻語夫曰：「王郎心裏莫野，出去早些歸舍。莫抛我一去不來，**

84.　**交（教）我共誰人語話。爭肯出門出戸，如今時徒轉差。門前過往人多，**

85.　**恐怕驚他驢［馬］。」**王郎既爲駙馬，言與高品知聞，鍼（書）題來往，以相邀

更に、若干の文字を細かに加筆する場合もある。次の文章は、王が金剛の壻を探しに大臣を派遣する場面である。

S.4511

83.　須相就取，倍些房臥莫爭論。」於是宰相拜

84.　辭，出内便即私行坊市。諸州處處求覓，朝朝尋

85.　覓。後忽經行街巷，［見］貧生子，性（姓）王，施（試）問再三，當

86.　時便肯，令（領）到内門尋得。皇帝大悦龍顔，

87.　遂朝（詔）宰相，速令引到。皇帝座（坐）想（於）寶殿，

P.3048

60.　於是大臣**受勅**，拜辭出内，便即私行坊市。**巡曆（歴）**諸州，處［處］問人，朝朝

61.　尋覓。後忽經過，見**一**貧生，試問婚因（姻），**他言**便肯。當時領到

62.　内門，**先入見王，言奏**尋得。皇帝聞說，大悦龍顔，遂詔一臣，速令引對。

以上、幾つかの例によって、P.3048 に行われた加筆の一端を窺い知れたであろう。そして、次の ii）にも、これらと同じ加筆が行われており、P.3048 と他の 4 點の寫本の差異が讀み取れる。

ii）加筆と削除の錯綜、および話の順序の入れ替え

P.3048 と他の寫本では、加筆と削除が錯綜し、且つ話の順序が入れ替わる箇所がある。それは、金剛が佛に歸依して懺悔し、絶世の美女になる場面である。

まず、S.4511 の 140 行目から 150 行目、P.3048 の 94 行目から 101 行目を取り上げる。

S.4511

140.　須出來相見，我此事恥，所以憂愁，怨根（恨）自身，

141.　尋相（常）不樂。」**A** 王郎道。［云］云「我無怨（愁）恨亦無嗔，

自嗟

142.　前生（世）惡業因。只爲思君多醜貌，我今恥辱會

143.　諸賓。來朝若也朝官至**B** 還須娘子（娘子還須）勸酒巡。出到

144.　座延（坐筵）相見了，交（敎）着（我）恥辱沒精身（神）。」**C** 公主既聞此事，

145.　哽噎不可發言，慙見醜質（身），燕（嚥）氣淚落：「前世種

146.　何因果，今生之中，感得醜陋？」**D** 夫主去後，便捻

147.　香爐，向於靈山，禮拜發［願］。**E** 醜女纔見（聞）淚數行，聲中

148.　哽噎轉非（悲）傷。**F** 豈料我無端正相，致令闇地苦商

149.　量。粈枝（胭脂）合子捻拊（抛）却，釵朶籠鏵拔一傍，兩

150.　淚落燒香思法會，遙告靈山大法王。**H** 佛已（以）［他］）

P.3048

94.　我恥此事，所以憂愁不樂。」**A** 王郎道：「我無愁恨亦無嗔，

95.　自嘆前生惡業因。只爲思君多醜貌，我今羞恥會諸賓。來朝若也朝官至，**B**

96.　娘子被王郎道着醜貌，不免兩淚，羞恥怨恨。「此身種何因果，今生■（感）

97.　得如斯？」**D** 公主纔聞淚數行，聲中哽噎轉悲傷。**F** 怨恨前世何罪業，

98.　今生醜陋異子尋常。再三自家嗟嘆，［□］（嘆）了無計，遂罪（罷）粧臺，心中

99.　億（憶）佛，乞垂加護：懊惱今生貌不強，緊盤雲髻罷紅粧。**G** 豈料我無端正相，

100.　置（致）令暗裏苦髙（商）量。胭脂合子捻抛却，釵朶瓏璁調一傍。雨淚焚香思法

101.　會，遙告靈山大法王。**H** 於是娥媚（眉）不掃，雲鬢罷梳，遙［□］靈山，便告世尊：

以上の差異をまとめると次のようになる。

［表 1］

S.4511	A	B	C	D	E	F		H
P.3048	A	B		D		F	G	H

A）P.3048 には「怨恨自身，尋常」の 6 字がない。

C）P.3048 の B に S.4511 の文章が脱落しているため、繋がりが悪い。續く D の文章がかなり加筆されているため、その過程で文意が通らなくなったものであろう。

D）主旨は同じであるが、字句の異同がある。筆寫される過程で間違ったのではなく、表現が書き換えられたものであろう。

E）P.3048 にはこの 15 字なし。

G）S.4511 にはこの 51 字なし。

A から G までの 8 段中、3 段に加筆と削除が起こっている。

次に、これに續く文章、S.4511 の 150 行目から 164 行目、P.3048 の 101 行目から 117 行目を取り上げる。ここでは更に大きな書き換えがあり、話の順序も入れ替わっている。

S.4511

150.　（淚落燒香思法會，遙告靈山大法王。）佛已（以）［他］

151.　通心（心通），遙見金剛醜女燒香發願，遂於醜

152.　［女］居處階前，［從地誦（踊）出，親垂加護。醜女忽見大聖世尊，擧（現）身皆（階）前，渾搥自撲，起來禮拜，哽噎］悲泣，**J** 恰似四馬而分離；思念自身，

153.　不恨滅沒而入，**K** 堆（惟）願世尊，願垂加備（被）。云云 **L**「珠淚連連

154.　怨傷（復）嗟，一種爲人面貌嗟（差）。玉葉不生端正樹，金

155.　騰（藤）結朶野田花。見說牟尼長仗（丈）六，八十隨形號

156.　釋迦。惟願慈悲加護我，三十二相與些些。」**M** 佛有

157.　他心道眼，當時遂遙觀見。珠（現）身向醜女前頭，

158.　令交（教令）懺悔發願。醜女佛前懺罪愆，所以（爲）惡自

159.　業自招然。懺悔纔中（終）兼發願，願令果報福團

160.　圓。**O** 公主見佛至，容貌世無比，［髮］紺玄（旋）縲（螺）文，眉如雙日（月）

161.　翠，口似頻婆菓（果），四十二牙齒，兩目海澄澄，胸前

162.　題萬字。**Q** 金剛醜女嘆佛已了，右遶三遞（匝）退座

163.　一面。佛已（以）慈悲之力遙（垂）金色臂，指醜女身，醜

164.　女形容，當時變改。**R** 嘆佛了，求加備（被），低頭禮拜心

P.3048

101.　（會，遙告靈山大法王。）於是娥媚（眉）不掃，雲鬢罷梳，遙［□］

靈山，便告世尊：**I**

102.　「珠淚連連怨復差，一種爲人面貌差。玉葉木生端正相，

103.　金騰結朶野田花。見說牟尼長丈六，八十隨形號釋迦。

104.　唯願世尊加被我，三十二相與些些。」**M**

105.　佛以他心通，遙知金剛醜女焚香發願，遂於醜女居處前，

106.　從地踊出，親垂加被。醜女忽見大聖世尊，碎身階前，魂搥自

107.　僕（撲），起來禮拜，哽噎悲涕，**J** 啓告世尊，乞垂加護。醜女告世尊：L

108.　「自嘆前生惡業因，置（致）令醜陋不如人。毀謗聖賢多造罪，

109.　敢昭容貌似煙薰。生身父母多嫌棄，姊妹朝朝一似嗔。

110.　夫主入來無喜色，親羅未看見慇懃。時時懊惱流雙淚，

111.　往往咨嗟怨此身。聞道靈出（山）三界主，所以焚香告世尊。」N

112.　佛有他心道眼，當時遂遙觀見。現身公主前頭，交（教）令懺悔發願。

113.　醜女佛前懺罪愆，所爲宿業自招然。懺悔纔終兼發願，

114.　當時果報福團圓。**O** 醜女見佛現，身歡喜倍常，遂讚嘆如來，

115.　「願我身與佛無異！」**P** 公主見佛至，顏容世無比，髮紺旋螺文，

116.　眉如初月翠，口似頻婆果，卌二牙齒，兩目海澄澄，胸前題萬字。**Q**

117.　嘆佛了，求加被，低頭禮拜心轉志。容顏頓改舊時容，百醜變作千般媚。

以上の差異をまとめると次のようになる。

［表 2］

S.4511			J	K	L	M		O		Q	R
P.3048	I	M	J		L		N	O	P	Q	

P.4511・J の脱文は、このもとになった寫本に既になかったのか、S.4511 の筆寫時に書き飛ばしたのかは不明である。

I）先に見たHに續く文章が、S.4511 では J が續くのに對し、P.3048 では別の I の 17 字が挿入され、且つ M の文章が前に來ている。

K）S.4511 では、J の次に K の文章があるのに對し、P.3048 では J の次の K の文章は削除され、L へと續く。

M）S.4511 では L に續く M が、P.3048 では I の次に移動している。

O）S.4511 では M の後に O が續くのに對し、P.3048 では、かなりの長文 N の 84 字が新たに挿入されている。

Q）S.4511 では O の後に Q が續くのに對し、P.3048 では、その間に P の 22 字が新たに挿入されている。

R）S.4511 では Q の後に續く R の 38 字が、P.3048 では削除されている。

これらの文章の入れ替え、削除、挿入は、I から R までの 11 段中、半數を占める 6 段に起こっている。

表 1 と表 2 に見られる S.4511 と P.3048 の相違の量からは、これらの書き換えが偶然に起きたものではなく、意圖的に行われたものと判斷できる。特に、P.3048 に加筆された文章はかなりの量に上る。だが一方で、この書き換えには、P.3048 の思想的發展・變化があるとも思われない。それ以上に、物語性を增したものとなっていると言える。それは恐らく、この書き換えが、講經において、より多くの聽衆を引き付けることを目的としたものであったのだろう。

ここで第 1 章の問題に立ち返ると、これほど複雜に書き換えが行われながらも、『賢愚經』等の佛教經典に依拠した改編ではないことは、着目すべき點である。

iii）韻文の書き換え

i）や ii）にも韻文の加筆は見られたが、P.3048 の韻文は、他の寫本に見られる韻文を少しく書き換える場合もある。太字部分がその該當箇所である。

S.4511

42.　音菩薩 「只守（首）思量也大奇，朕今王種豈如斯？ 醜

43.　陋世間人總有，未見今朝惡相儀。**彎山倉**崛

44.　**縮如龜**，渾身恰**似**野猪皮。**任**你丹青心裏巧，

45.　綵（彩）色千般畫不成。獸頭渾是可增見（憎貌），國内計應

46.　無竝比。**若輪（論）此女形貌相**，長大將身娉阿誰？」於是

P.3048 では、この第 5 句の韻文が書き換えられている。そして、第 9 句に新たな韻文が加筆された一方、第 11 句が削除されている。その他、若干の文字異同も起こっている。

P.3048

23.　「只首思量也大奇，朕今王種起（豈）如斯？ 醜陋世間人總有，

24.　未見今朝惡相儀。**嵗崇跼蹜如龜鱉**，渾身又似野猪皮。

25.　**饒**你丹青心裏巧，彩色千般畫不成。**宮人見則皆驚怕**，

26.　獸頭渾是可憎兒（貌）。國内計應無比竝，長大將身娉阿誰？」

これと同じ文字異同の例をもう1つ擧げる。

S.4511
104.　乃蘇。宮人道何言語？ 女緣前生貌不敷，每看恰似
105.　獸**頭牟**。天然既沒紅桃色，**遮莫身上 七寶**
106.　**叫身鋪**。夫主諕來身以到（已倒），宮人侍婢一時扶。多少
107.　内人噴水求（救），須臾得**活却醒甦**。於是兩個阿

一方のP.3048では、第2句目、第8句目に文字異同があり、第4句目に書き換えがある。

P.3048
73.　女緣前生貌不敷，每看如似獸**形軀**。天然既沒紅桃臉，
74.　**占不頭盈白王（玉）梳**。夫主諕來身已倒，宮人侍婢一時扶。
75.　多少内人噴水枚（救），須臾**始得却星（醒）蘇**。於是兩個阿姊，卑
□（不明字）王郎

このような例とは異なり、若干の文字の書き換えだけが起こる場合もある。

S.4511
56.　謀（媒）。雖然富貴居樓殿，恥辱房臥（緣無）傾國容（才）。勅下
57.　**十年令**鏁閇，深宮門戸不**曾**開。於是金剛醜女

この第2句目については、寫本ごとに差があるため、P.3048との關係は測り難い。しかし、第3句目と第4句目では、P.3048に若干の書き換えが確かめられる。

P.3048
35.　慚惶誰更覓良媒。雖然富貴居樓殿，恥辱緣無傾國財（才）。
36.　勅下**令交（敎）便**鏁閇，深宮門戸不**交（敎）**開。

以上、i）加筆、ii）加筆・削除・話の順序の入れ替え、iii）韻文の書き換えという3點から、S.4511を代表とした4點の寫本とP.3048との差異を見てきた。これらの差異は、P.3048の書き換えが特定の箇所ではなく、全體にわたって様々に行われたことを示している。そしてそれは、從來の校合翻刻の問題を示すものでもある。

從來の翻刻資料では、ある箇所ではS.4511を中心とし、またある箇所ではP.3048を中心とするという校合方法によって翻刻を行われていた。しかしそれでは、全體を通讀したときに、實際にはどの寫本にも存在していない内容となってしまう

のである。「金剛醜女縁」の5點の寫本は、S.2441、S.4511、P.2945V、P.3592Vを1つとし、P.3048を別に扱う必要があると言えよう。

さて、このP.3048の獨自性を踏まえた上で、P.3048の識語の問題を取り上げる。

先述の通り、P.3048には“壬午年二月廿一日”との識語がある。10世紀における壬午は、西暦922年と西暦982年である。しかし、P.2945VやS.4511の書寫年代を踏まえると、それらと大きく内容を異にするP.3048が922年の識語を持つとは考えられない。P.3048の“壬午年”とは、982年を指すものである。そして、この識語は、醜女縁起の本文と字體を異にしており、別人の筆寫になるものである。當然、識語は醜女縁起より後の筆寫であることから、醜女縁起は982年までに書かれたことになろう。

第3章、3段階の「金剛醜女縁」

本章では、「金剛醜女縁」の寫本のうち、結末を有するS.2114V、S.4511、P.3048を取り上げ、その成立過程を考察する。S.2114Vは數行書寫されていないが、本考察に支障は無いため、併せて考察對象に加える。また、前章で見たようなP.3048と他の寫本との差異も本考察では問題とはならない。

筆者が考えるに、S.2114V、S.4511、P.3048に見られる結末は、既に後人の手によって書き換えられており、結末の前までと結末とでは、その成立時期を同じくしていない。S.4511より、問題の結末部分を抜粹する。これは、金剛が美しくなる場面である。

S.4511

163.　一面。佛已（以）慈悲之力，逶（垂）金色臂，指醜女身，醜

164.　女形容，當時變改。嘆佛了，求加備（被），低頭禮拜心

165.　專志。容貌頓改舊時儀，百醜遍（變）作千嬌美（媚）。醜

166.　女既得世尊加備（被），換舊時醜質，作今日之面（周）旋；醜

167.　陋形軀，變端嚴之相好。敢（感）得［貌若春花］[18]，王郎入來不識。妻云

168.　道：「識我否？」夫云道：「不識。」「我是你妻，如何不識？」夫道：

169.　「娘子天生似獸頭，交（教）我人前見便羞。今日因何頭（端）正

170.　相，請君與我說來由。」妻語夫曰：「自居（君）前時，憂我

[18]この4字はP.3048によって補う。ただしS.2114Vにもこの4字はない。

171.　身醜（醜身）。妾生煩惱再三，禱祝靈山，世尊深起慈悲，
172.　便須（垂）加祐。」云　「我本前生貌不強，深慚日夜辱王郎。
173.　遙想釋迦三界主，不捨慈悲降此方。便禮拜，
174.　再（更）添香，不覺形容頓改張。我得今朝端正相，
175.　感賀（荷）靈山大法王。」王郎既見妻端正，入宮奏上
176.　大王。云云　王郎栢（拍）手歡喜，走報大王宮裏。云云　「丈人丈母
177.　不知，今日具見喜事。小娘子如今改變，不是舊
178.　時精魅。欲說醜女此時容，一似佛前菩薩子。」大王
179.　聞說喜徘徊，火急忙然尋（覓）女來。夫人傢（隊）仗離宮殿，
180.　大王御輩到長街。纔見顏面，灼灼桃花滿面開。

まず、164 行目から 165 行目の 3 － 3 － 7 － 7 － 7 に注目したい。實はこの文體は、「金剛醜女縁」ではここで初めて使われる。また、續く 173 行目から 175 行目にも使われている。つまり、この場面以前にはなかった文體が現れるのである。なぜ金剛の容貌が變わる結末に近い場面において、突然に文體が變化したのか。3 點の寫本を比較すると、この文體が、書き換えを經て生まれたことを示唆する箇所がある。上掲 S.4511 の 180 行目“纔見顏面，灼灼桃花滿面開”に對應する S.2114V と P.3048 の文章を取上げる。

S.2114V
104.　然覓女來。夫人隊丈（仗）離宮殿，大王御駕到長街。**纔見女喜顏色迴，灼灼桃花滿面開**。

P.3048
133.　夫人隊丈離宮内，大王御輦到長街。**纔見女，喜徘徊，**
134.　**灼灼桃花滿面開。大王夫人歡喜曬，因慈（茲）持地送資財（材）**。

S.4511 と S.2114V とが異なるのは、書き損じのためか、もともと文章が異なっていたためか、判斷し難い。しかし、兩寫本の該當箇所が、ともに 3 － 3 では始まっていないことは確かめられる。つまり、この場合、多くの書き換えが行われた P.3048 にのみ 3 － 3 － 7 － 7 － 7 が使われているのである。そして、S.4511 の上掲の引用部分を P.3048 と併せて讀み進めると、再びこの文體が見られる。（S.2114V は上掲 104 行目で擱筆している。）

S.4511
186.　請問：「**下卸（御）輦，禮金人，便（更）將珍［寶］獻慈親。我**

女前

187.　**生修何業，一傷（場）醜陋卒難陳**。賴爲如來相加備（被），

188.　還同枯木再生枝。惟願慈悲加念力，爲說前生

189.　修底因。」佛告波斯匿王：「諦聽諦聽，汝當有事

P.3048

137.　同赴祇園，謝主公號端正。「**下御輦，禮金人，更將珍寶獻慈尊**。

138.　**我女前生何罪過，一塊（場）醜陋卒難陳**。賴爲如來親加被，

139.　還同枯木再生春。唯願如來慈念力，爲說前生修底因。」

この３－３－７－７－７以外に、もう１つ注目すべき文體がある。

S.4511の167行目後半から始まる文章は、王郎と金剛の會話である。これは、短い會話文を應酬する文體であり、そのために會話のテンポが非常に速い。この小說の如き文體は、３－３－７－７－７と同じく、この場面まで一度もない。更には、“云道”という會話導入表現も、この場面に至って初めて使われる。

なぜ結末に近い箇所にのみこのような幾つもの文體變化が起こっているのか。ここで考えられるのは、現存する「金剛醜女緣」の結末部分が、既に何者かによる書き換えを經た可能性である。現存する「金剛醜女緣」のもとになった寫本は、恐らく上掲のような文體變化はなかったであろう。この書き換えは、現存する敦煌文獻からは知ることのできない別の「金剛醜女緣」が存在したことを示すものである。

このように、「金剛醜女緣」は、i）結末部分が書き換えられる前の「金剛醜女緣」、ii）S.2114V、S.4511、P.2945V、P.3592Vの「金剛醜女緣」、iii）P.3048醜女緣起（醜變）、という３段階の發展を經たものと考えられる。ここで１つ確認しておく。『敦煌變文集』の校記［四五］には、次のような注記がある[19]。

新婦出來見王郎，　都緣面貌多不強，
綏女嬪妃左右粧，　前頭掌扇鬧芬芳。
金與玉釧滿頭裝[四五]，　錦繡羅衣馥鼻香。
王郎纔見公主面，　聞來魂魄轉飛傷。

［四五］此句乙卷作「金與玉，滿頭裝」，爲三字句。

確かに乙卷（P.3048）は３字句に作っている。そしてここで區切れば、その文體は３－３－７－７－７となる。だがここには、その前後において、上掲のような會話のテンポの變化、會話導入表現の變化、３－３－７－７－７の利用等は認められ

[19]『敦煌變文集』、793頁、804頁。

ない。この一部だけを取り上げて文體變化を讀み取るよりも、P.3048 は「釧」字を脱落したと解する方が自然であろう。

第 4 章、P.3048 醜變から見た變文への變化

本章では、P.3048 にのみ冠された醜變という名稱から、變文の成立について考察する。

周知の如く、初期の敦煌學では、變文という名稱が一人歩きし、敦煌文獻全體を指す語として使われた時期さえあった。この變文の定義に對する反省は多くの學者から提起され、現在では、變文を狹義と廣義とに分けて考えることが多い。そのうち狹義の變文とは、敦煌文獻中の變および變文という名稱をもつ 18 點を指す。P.3048 醜變を含まず 17 點とする場合もあるが、以下に述べる如く、筆者はその必要性を認めない。そして、變や變文という名稱がなくとも、狹義の變文と同じ特徴を備える寫本を變文文獻と認めることが一般的である。その變文か否かの判斷基準は、主に以下の 2 點に集約される[20]。

1. 講唱體で書かれていること。特に、その韻文は七言を主とする。
2. 韻文導入表現として、「看……處。」「……處，若爲陳說。」等の表現があること。また繪畫の使用を示す語句が見受けられること。

しかし、從來の變文研究では、現存する變文に多くは見られない特徴を有する場合、變文文獻として認定されないことがあった。例えば舜子變文（S.4654V 舜子變一卷、P.2721V 舜子至孝變文）は、變や變文との眞題を有しながらも、講唱體ではないために、長らく例外變文とされてきた經緯がある[21]。これは、他の變文と比較判斷することにより、變や變文という名稱を冠された文獻でさえも、變文とは認められなかった例である。しかし、ここには問題がある。

變文が繪解きと關係を有することは、幾つかの唐詩から知られており[22]、そこには韻文が歌われたことを示す表現も殘されている。よって、講唱體が變文の性質であることを肯定する識者の見解は、充分妥當なものである。しかし、變文が寫本に書き下される場合においてまで、同様に講唱體である必要はない。これは、講經に組み込んだり、讀み物化したりするなど、その寫本を實際に用いる（筆寫す

[20]他に、俗語の使用や筆記者の身分が高くないこと等も、變文寫本の特徴として指摘される。

[21]荒見泰史氏、桂弘氏「從舜子變文類寫本的改寫情況來探討五代講唱文學的演化」『敦煌學』第 26 輯、2005 年、93-110 頁。（荒見泰史氏『敦煌講唱文學寫本研究』（浙江大學古籍研究所中國古典文獻學研究叢書、2010 年）に所收。）

[22]吉師老「看蜀女轉昭君變」、李賀「許公子鄭姬歌」、王建「觀蠻妓」（以上『全唐詩』）、李遠「轉變人」（『夾注名賢十抄詩』）。

る）人物が望む形式によって變化するためである。その人物が、韻文を書寫する必要を認めなければ、散文だけが書寫されることになる。このような書寫の特徴を踏まえるならば、舜子變文を例外的に扱う必要はないのである。

筆者は、このような見解に立つことにより、變や變文という名稱を持つ文獻を、その書寫狀況によって除外することに否定的である。「金剛醜女緣」5 點の寫本の中、P.3048 にしか變文との關わりが指摘できないため、それを變文文獻とは認めない見解もある。しかし、上述の如く、P.3048 は、他の 4 寫本の内容を改編し、それらと多分に内容を異にする特徴を持っている。その尾題には、確かに醜變と書かれているのであり、これはやはり、當時變文として認められていたものと考えるべきであろう。

ここでは、醜變に關して 2 つの問題に言及する。

まず、P.3048 は、他の 4 點の寫本にある内容や表現を様々に書き換えたにも關わらず、韻文導入表現は、4 點の寫本の表現を踏襲している。そのため、「看……處」のような、繪畫との具體的關連を示す常套句が 1 つもない。これは、舜子變文において講唱體による書寫か否かが變文の判斷基準ではないのと同じく、直接に繪畫との關連を示す表現があるか否かが變文の判斷基準とならないものと考えられる。

また、先に見たように、「金剛醜女緣」5 點の寫本のうち、P.3592V 以外の眞題を殘した 4 點全てに、緣や緣起、因緣との名稱が冠されていた。遡ると、緣、緣起、因緣等の名稱を持つ因緣譚や譬喩譚は、六朝時代の唱導において、對俗信者の教化に使われていた經緯がある[23]。では、多くの書き換えが行われた P.3048 に變文との關係が窺われることは、どのように説明されるのか。

それは、もともと變文でなかった因緣譚が、變文の 1 つに數えられるようになっていったことを意味しているのではないか。これは、醜變に限らず、S.3491 頻婆娑羅王后宮綵女功德意供養塔生天因緣變にも通じる。この因緣譚も、「金剛醜女緣」と同じく、もとは變とは題されていなかったのであろう。もともと變文でなくとも、既に變文と同じ、またはそれと近しい性質を持ち合わせていれば、それらを變や變文と呼ぶようになったとは想像に難くない。それはつまり、變や變文という言葉の使われる對象が、徐々に變化し、廣がりを見せていったということである[24]。

---

[23]「論曰：唱導者，蓋以宣唱法理，開導衆心也。昔佛法初傳，于時齊集，止宣唱佛名，依文致禮。至中宵疲極，事資啓悟，乃別請宿德，昇座說法。或雜序因緣，或傍引譬喩。」慧皎撰『高僧傳』巻第 13 唱導、『大正藏』巻第 50。張鴻勛氏「敦煌遺書中的“說唱因緣”」『曲藝講壇』創刊號、1996 年。（『敦煌俗文學研究』（甘肅教育出版社、2002 年）に所收。）

[24]金文京氏に次の指摘がある。「變文の意味するところは、時代によっても變化したであろうし、

結語

本論は、「金剛醜女緣」の5點の寫本を、從來の翻刻資料からではなく、各寫本ごとに取り上げ、それぞれの特徵を考察したものである。以上の考察からは、「金剛醜女緣」が、S.4511とP.3048を中心とした從來の校合方法ではなく、P.3048と他の4點の寫本とを分けて扱う必要性を明らかにできたであろう。しかし、「金剛醜女緣」については、實際の講經や儀式、變文をはじめとする他の敦煌佛教說話と、いかなる具體的關係を有していたのか、まだ多くの問題が殘されている。それらの解決には、個々の寫本に對するより詳細な研究とともに、敦煌佛教という大きな枠組みの中で變文や佛教說話を捉える視點も必要となる。これらはまた、筆者の今後の課題としたい。

最後に、これまで校合の中心寫本とされてきたS.4511やP.3048ではなく、あまり注目を浴びてこなかった初期の書寫狀態を殘すP.3592Vの翻刻をここに掲載する。

【資料】P.3592V 翻刻

1. □□□□□□□（我佛當日爲救門）徒六道輪廻，由（猶）如□（舟）
2. □□□□□（船，般運衆生），達於彼岸。此時總
3. □□□□□□□（得見佛，今世足衣）足飯。修行時□□（至，勤）
4. □□□□□□□（須發願。布施有多）種因緣，一一不及廣
5. □（讚）。設齋歡喜，□（果）報圓滿。若人些子
6. 攢眉，來世必當醜面。佛在之日，有一善
7. 女，也曽供養辟支，［雖］有布施之緣，心裏
8. □（便）生輕賤。不得三五日間，此女當時身
9. 死，向何處託生？ 向於波斯匿王宮内託生。
10. 此是布施因緣，生於國王之家。輕慢賢聖
11. 之業，敢（感）得果報，元在於我大王夫人。纔生
12. 三日，進與大王。大王纔見之時，非常驚訝。
13. 世間醜陋，生於貧下。前世修甚因緣，今
14. 世形容轉乍？　觀世音菩薩
15. 「只守（首）思量也大奇，朕今王種豈如斯？ 醜陋世間人總有，
16. 未見今朝惡相儀。彎山倉䋲縮如龜，渾身恰似野猪皮。
17. 任你丹青心裏巧，綵（彩）色千般畫不皮（成）。獸頭渾是可增見（憎貌），
18. 國内計應無比竝。［若論此女形貌相］，長大將身娉阿誰？」

同時期にあってもある一定の範圍内でかなり恣意的に用いられたと考えられる。そしてそれは、樂府という言葉が、古民謡から詞、曲、演劇までも指すようになったことに見られるように、中國文學、特に俗文學の世界ではむしろふつうのことであった。變文もおそらくその例に漏れないであろう。」「中國の語り物文學―說唱文學」『中國通俗文藝への視座』（新シノロジー・文學篇）、神奈川大學中國語學科編、1998年、85-124頁。

19. 於是大王處分宮人，不得唱說，便遣送在深宮，更莫
20. 將來，休交（敎）朕見。云云　女緣醜陋世間希，
21. 遮莫身上掛羅衣。雙脚跟頭脧又𦟀（僻），髮如宗（棕）樹一枝枝。
22. 看人左右和身轉，擧步何曾會禮儀。十指纖纖如路（露）柱，
23. □（一）雙眼似木塤離（槌梨）。公主全無窈窕，寔（實）事非常不少（小）。
24. □（上）脣半斤有餘，鼻孔竹筒渾小。生來已（未）省歡喜，
25. 見說三年一笑。覓他行步風流，却是趙十襪襟。云云
26. 大王見女醜形骸，常與夫人手托腮（拓顋）。憂念沒無心求駙馬，
27. 慙惶誰更覓良媒。雖然富貴居樓殿，恥辱緣房（無）傾國財（材）。
28. 勅下十年令鑠閇，深宮門戶不曾開。云云
29. 於是金剛醜女日來月往，年漸長成。夫人宿夜憂愁，
30. 恐大王不肯發遣。後因遊戲之次，夫人斂容進步，向前咨
31. 白大王。云云　「賤妾常慙醜質身，虛霑室宅與王
32. □（親）。日日眼前多富貴，朝朝惟是用珠珍。
33. 宮人侍婢常随後，使喚東西是大臣。
34. 漸恥這身無得（德）解，大王寵念赴乾坤。
35. 妾今有事須親奏，願王歡喜莫生嗔。
36. 金剛醜女年長成，爭忍令交（敎）不■仕（事）人。」
37. 於是大王量（良）久沉音（吟），未容發言。夫人又奏：
38. 「姊妹三人總一般，端正醜陋繼因緣。
39. 竝是大王親骨肉，願王一納賜恩憐。
40. 向今成長居深内，發遣令交（敎）使向前。
41. 十指從頭長與短，各各從頭施（試）咬看。」
42. 大王見夫人奏勸再三，不免諮告夫人。云云
43. 「我緣一國帝王身，眷屬由來斷業因。
44. 爭那就中容貌乍，交（敎）奴恥見國朝臣。
45. 深（心）知是朕親生女，醜乍都來不似人。
46. 說着上（尚）猶皆驚怕，如何祝（囑）娉向他門。」云云
47. 夫人道：「大王若無意發遣，妾也不敢再
48. 言。有心令遣事人，聽妾今朝一計：私
49. 地詔一宰相，［敎］覓薄落兒郎，官職金
50. 玉與伊，祝（囑）娉奔奔奔充爲夫婦。」於是
51. 大王取其夫人之計，即詔一臣，交（敎）作良
52. 媒，便即私地發遣。臣下速赴内廳，面
53. 對天勅，受王進旨。王告臣曰：
54. 「卿今聽朕語，子細說來處。緣是國夫人，
55. 有一親生女。天生貌不強，只要且瞟眝（瞟眝）。
56. 覓取一兒郎，娉與爲夫婦。」云云　平
57. 「卿爲臣下我爲居（君），今日商量只兩人。
58. 召慕（招募）切須看隱（穩）審，惆悵莫遣外人聞。
59. 相當不猒無才藝，莽蔨何嫌徹骨貧。

60. 萬計事須相就取，陪些房臥不爭論。」云云
61. 於是宰相拜辭出内，便即私行坊市，諸
62. 州處處問人，朝朝尋覓。後忽經行街堪（巷），
63. 見貧生［子］，姓王，施（試）問再三，當時便肯，領到
64. 内門尋得。皇帝大悦龍顔，遂詔宰相，
65. 速令引到。皇帝坐相（於）寶殿，
66. 宰相曲躬來見：「前時奉勅覓人，
67. 今日得依王願。門前有一兒郎，
68. 性行不方（妨）慈善。出來好哥（個）面毛（貌），
69. 只是有些舌短。」云云　大王聞說喜徘徊，
70. 捲上珠簾御悵（帳）開。既強聖［人］心裏事，
71. 也兼皇后樂嗲嗲（咳咳）。嬪妃婇女令詔入，
72. 内監忙忙迤邐催。便把布衫揩式（拭）面，
73. 打板精神直入來。云云
74. 王郎登時見皇帝時，道何言語。云云
75. 於是貧士蒙詔，跪拜大王以（已）了。
76. 叉手又說寒温，直下令人失笑。
77. 更道下情無任，得仕（事）丈母阿嫂。
78. 起居進歩向前，下情不勝怜（憐）好。

（作者は廣島大學總合科學研究科博士課程）